



朝陽を浴びる敦煌莫高窟



壁画の保存修復について学ぶ筆者（左から2番目）



土産物屋で働く友人。のちにガイドに転身した



文化遺産と暮らしてみよう

写真：莫高窟警備員との夜宴（左から2番目が筆者）

〇〇してみました世界のフィールド

敦煌莫高窟の日々

すえもり かおる 末森 薫 民博 機関研究員

古代シルクロード文化の様子を伝える敦煌莫高窟。信仰の場として受け継がれ、今では保護や観光の対象として、多くの人を集める。ときの流れとともに行き交う人びとの様子を眺めてきた洞窟は、ただそこにたたずみ、人びととつながり続ける。

中国甘粛省の西端にある敦煌は、東西文明をつなぐシルクロードの要衝として、古くから人びとが行き交う場所であった。敦煌の街から東南に二五キロメートル離れた砂漠のなかに、世界遺産としても有名な敦煌莫高窟が存在する。南北一六〇メートルにわたる崖面に、五〇〇近くの洞窟が穿たれ、そのなかには彩色豊かな仏教の壁画や彫像が残される。

わたしは、二〇〇七年五月から九月にかけて、東京文化財研究所と敦煌研究院が共同で実施した「敦煌壁画の保護に関する日中共同研究」に研修生として参加する機会を得て、四力月のときを敦煌莫高窟で過ごした。

朝、太陽が昇ると、東を向く崖面に光が反射する。その光景を眺めながら、ラジオ体操の音源に合わせて体を動かすのが日課であった。昼間は国内外から訪れた大勢の観光客で溢れかえる洞窟を横目に、壁画の保存修復をはじめとして敦煌莫高窟で取り組まれる多方面の活動について学んだ。洞窟が閉じられる夕方を迎えると、潮を引いたように人びとは去り、静寂のときが訪れる。夜には、月や星の明かりのなかに潜む洞窟の気配を感じながら、友人たちと夜のひとときを饗した。

この日常を繰り返すなかで、短期的に訪れるだけでは知ることのできない文化遺産と人びとのかかわりを知った。悠久の歴史をもつ敦煌莫高窟の周辺では、文化遺産を護る人びと、文化遺産と生きる人びとが、さまざまな営みを繰り返していた。

文化遺産を護る人びと

敦煌莫高窟の研究および管理を一手に担う敦煌研究院では、職員がそれぞれの専門を活かして、文化遺産の研究や管理、保存に携わっている。敦煌出身の者もいるが、中国各地から、敦煌へと導かれてきた者も多い。

文化遺産の保護にあたる専門家は、敦煌莫高窟に忍び寄りさまざまなリスクと向き合い、その対策を講じている。たとえば、砂漠から運ばれる砂は、洞窟のなかの壁画や彫像を痛める大きな天敵となる。洞窟の上部では、植物やネットを駆使して、砂が洞窟に入るのを防ぐ試みが進められる。

また連日訪れる観光客の管理も大きな課題である。その対策として、一般に開放する洞窟の制限や同時に入れる人数の調整がおこなわれるほか、湿度や二酸化炭素濃度などをモニタリングし、洞窟内の環境を随時確認している。そして、種々の劣化の症状が見られる壁画や彫像に対して、適切な方法を検討したうえで保存修復作業が進められる。彼らの取り組みに、終わりはしない。

文化遺産と生きる人びと

他方、レストランや土産物屋の従業員、清掃員、警備員、観光ガイドなど、文化遺産に関係する多様な職につく人びとと敦煌莫高窟の周辺で大勢出会った。地元の人びとにとって文化遺産は生きる糧でもある。

二〇一四年一月、調査で久々に敦煌莫高窟を訪れ、研修中に出会った人びとを探して歩いた。まずは、滞在したホテル、三食を賄ってくれたレストランを訪問したが、オーナーをはじめ、知っている従業員は、誰もいなかった。当時と変わらぬ景色を眺めながらも、ときの流れを感じた。

しばらく歩みを進めると、見知った姿が目に入った。以前ホテルとレストランを切り盛りしていた彼は、洞窟の近くにある売店のオーナーへと転身を遂げていた。彼が作る懐かしの料理を食べながら、共通の知り合いの近況を聞いた。土産物屋で物売りをしながらガイドを目指していた友人はその夢を叶え、各地からやってくる人びとを連れて、敦煌莫高窟に通っているという。当時とは立場や職を変えている者が少なくなかったが、その多くはやはり文化遺産と関係した生活を営んでいる。

敦煌莫高窟での日々から教わったことは、文化遺産が、過去の芸術や歴史、宗教観を現在に伝える存在ばかりではなく、現代に生きる人びととつながり存在するということだった。この経験から得た感覚は、その後の研究活動や文化遺産の周辺に生きる人びととの関係を築くうえでの大きなよりどころになっている。



敦煌